



>心のエネルギープロセスの中で フェルデンクライスの動きとダンスを経験する<

テーマ： re-Searching Womb/ 'hara' : Grounding Challenging Moment/s in ourselves
母胎(子宮)/ 腹を(再)探究する：困難な瞬間に、私達の中の地に足をつける

講師 カールハインツ・ロッシュ/ 通訳付

ロッシュ氏の「ユニークなエネルギーに満ちた、ダンスアートプロセス」はどなたでも参加でき、自発的・創造的なグループの中、自分自身を体験することができます。自らの身体を「観て、聴く」「観て、聴くことを通して感じる」「観て、聴くことを通して繋がる」という視点から、参加者と共に、探索し、発展していきたいと考えています。自分自身の身体、心、たましいとの繋がりを回復し、人生の「一つ一つのステップ」と共に<One step/ dance beyond>することで、自らの心に耳を傾け、内省することを願います。今回は、母胎、腹からより広げ、おなか、胃、メタボリック、へそ、へそまがり、など、それぞれの想像力をおもいきり使って、探っていきます。

例年、京都文教大学でロッシュ氏はサイコ・エナジェティック（心のエネルギー）・ダンスのワークショップを行っています。このワークではダンスへとつながるモーシェ・フェルデンクライスの「メソッド」：ソマティック(*)な経験としての「動きを通した気づき」「機能的統合」とサイコ・エナジェティック・プロセスを皆さんと経験していきます。(*)ソマティックとは身体と心をつとめること

ユング派「サイコ・エナジェティック」で知られるシェレンバウム, P. にロッシュ氏は学び、アートやセラピーを超えた「ダンスアートプロセス」を展開。パフォーミングアーティストとして活躍する一方、映画製作を行うなど多方面で活躍。フェルデンクライス・プロセスの専門家でもあります。

< The r/e/a/l/ voyage of discovery lies not in seeking new landscapes, but
in having new/ E/y/e/s > (Marcel Proust) [現代社会に、秘境は存在するだろうか]

日時 2013年 11月 30日(土) 10:00 ~ 16:30
(9:00 開場、遅くとも 9:30 までには到着し場所に慣れてください)

場所 京都文教大学 洗心亭・樹心亭（日本家屋のお茶室・大学食堂の裏手）
参加費 9000 円（一般） 7000 円（割引）（定員 15 名まで）
(収入の少ない方や学生の方は割引料金での参加が可能です。ご相談下さい。)

申し込み方法 ワン ステップ/ダンス ビヨンドまで、メールでお申し込み下さい。
持ち物

動きやすい服装。お弁当、飲み物。～ 上記テーマに関連し、また 「個人的な問い」に関連する時。

情報と準備 <http://www.kyoto-station-building.co.jp/about/06.html> ワークの前に、京都駅を歩いて、「京都の都市の母胎」を経験してください。改築された JR 京都駅は、設計者原廣司氏によって脱構築され「京都の都市の母胎/マトリックス」として位置づけられたそうです。マトリックスとは「子宮」を意味するラテン語（< Mater 母+ix）に由来する英語 Matrix の音写で、そこから何かを生み出すものを意味します。ワーク終了後、参加者全員で一緒に京都駅に行き、それらを経験します。

参考：昨年末から今年 2 月まで水戸芸術館で「高嶺格のクールジャパン」という展覧会が開催されました。3.11 を経て、社会問題や人間の深層心理と対峙してきた現代美術家の作品が私達に問いかけています。展示カタログ(*3)も参照下さい。<https://arttowermito.or.jp/gallery/gallery02.html?id=341>

お問い合わせ >One step/ dance beyond~ / わんステップ/ダンスびよんど
E-mail: <dancebeyond@s5.wh.qit.ne.jp> ~ Tel: 090-9103-9949 (多田)



ロッシュ氏は、モーシェ・フェルデンクライスのとなりで、彼の映像を撮った後、フェルデンクライスの創造的学びのプロセスを学び、実践し、ロッシュ氏自身の個性を生かしたやり方で、それを伝えていくことを決めました。(モーシェ・フェルデンクライスは、ただ単純に同じ身体の動きを2回と繰り返すことを決してしませんでした。フェルデンクライスの実践者はアーティストのようにそれぞれの個性を生かし、また禅のようにいつでも「初心のころ」でいることを大切にします。)

参考図書：フェルデンクライス 「心をひらく体のレッスン」 新潮社
シェレンバウム 「愛する人にノーをいう」「愛されない者の傷」 あむすく
濱野清志 「覚醒する心体：こころの自然・からだの自然」 新曜社 (*1)
角田光代 「愛という言葉の向こうにあるもの」 森美術館 LoVE 展カタログ (*2)

文脈 <con/TEXT/lure> 織目

相馬千秋 [F/T13] 「物語を旅する」 <http://www.festival-tokyo.jp/ft13/concept.html>

“物語は共同体においてのみならず、私たち個人が生きていく上でもなくてはならないものだろう。私たちは普段「わたし」という物語を絶え間なく更新しながら生きているが、そのことを敢えて意識する必要はない：「私（たち）はどこから来たのか？私（たち）は何者か？私（たち）はどこへ行くのか？」”



<他者>の言葉に真に耳を傾けるためには、私たちは「自分にとっての真実」をしっかりと語ることができなくてはならない。<私>にとっての真実を語ること。そうすることではじめて、<他者>の語る「その人にとっての真実」を認めることができる。人は皆それぞれ、“生きた環境”のなかでの主である。そして、けっして他者の主になることはない。・・・そして、主どうしが語り合うことができる時、たがいの“生きた環境”の創造に参加しつつ、それぞれの“生きた環境”の違いを尊重することができるようになる。
(*1) 参照：濱野清志「覚醒する心体」p14, p191

現代の社会は、この世界の多様性を日常のメディアを通じて目の当たりにしつつ、そこで不必要に他者に共感するより、たがいがあまり干渉しないことを通じて、それぞれ小さな世界で充足するようにしている社会である。そのような状況のなか、この社会で真に求められるのは、理解しがたい遠く<他者>にも耳を傾け、違いに目をそらすことなくしっかりとそれを見据えつつ、その<他者>の生きかたを尊重することである。
(*1) 参照：濱野清志「覚醒する心体」p0

まだ名のつけられていない、未知のもの、それを、まったくあたらしい暗号のような言葉で、人々は共通認識として理解したのである。つまり、言葉が先にあって私たちはものごとを理解しているのではない。未知なるものに私達は言葉を与えて理解しようとするのである。(*2) 参照：角田光代



高嶺格 展示カタログ(*3)「3.11 からクールジャパンへ」より 震災以降、みんな「正確な情報」を探し続けた挙げ句に疲れ果てている。そういう中で、新たな「情報合戦」を仕掛けるような展覧会にはしたくなかった。その情報が正しいか/正しくないかについて観客に判断を迫るようなものではなく、置き去りにされてきた人々の「感情」をなぞっていくこと、見たあとに観客の中になんらかの感情が生まれることを目的としたいと思うようになりました。… 自分自身が媒介となることを目指したのです。… 今回6体の人体像が展示されていますが、元となったイメージはロダンの「カレー市民」という作品です。僕はもともと好きだった作品ですが、改めて見直したとき、この作品の「現代日本版」を作ろうと即座に思いました。「カレー市民」で表現されるのは、自分たちへの処遇への不安と不条理に対する怒りです。その姿は原発事故以後の日本の姿とたちまちつながりました。毛布を着せたのは、津波の直後に寒風の中たたずんでいた人々の姿が強く印象に残っていたからです。すべてを失い、唯一手にした毛布でようやく命をつなぎとめている。顔と手からは、怒りや不安や焦燥、いろんな表情が見える。あたたかい毛布を友人や自分の記憶(＝過去)に例えると、毛布からはみ出している顔や手が、現在や未来を暗示していると言えます。p19

「女は、女に生まれるのではない。女になるのだ」という、ボーヴォワールの有名な言葉がありま



す。自意識が形成される過程で、個人に対しいかに社会の集団意識が影響するかを端的に言い表したこの言葉は、現在の日本でますます大きな意味を持つのではないかと思います。「日本人は、日本人に生まれるのではない。日本人になるのだ」あまりに身時間にあっただめ意識に上ることのなかった物事。あるいは巧みに操作され、意識に上ることを妨げられてきた物事。これらの物事に対し、私たちがついに当事者となったのが現在の状況だといえるのではないのでしょうか？ 自分の中になにがあるのか？自分はどう作られてきたのか？3.11のあと煙に燻されるように出てきたのはその間이었다ように思います。「人はなんのために生きるのか？」古代から途切れることなく思想されてきたこの問いを、自分の生きてきた時間と重ねて、鑑賞者と共に考えてみようと思います。p16

世界に横行する不条理に対して、ひとりでも立ち向かおうとする意志があること。加えて、その意志を作品や展示を通して他者と共有しようと挑戦していること。そのために信じられる感覚を生み出そうと努力していること。作品の多くが、気がつかないうちに作品と鑑賞者の見えない壁を取り外す仕掛けがあること。…そして何よりも、高嶺さんの作品は鑑賞者自身が感覚や感情を取り戻すための装置であり、方法だから。こうした理由から、私は日本人の心が未来に進む方向について揺れている時期に、あなたたちのお父さんに個展を依頼したのだと思います。「高嶺格のふたりの娘とひとりの息子への手紙」2013年1月 高橋瑞木(水戸芸術館美術センター主任学芸員) p87

